# 標準英語の発達と
# 英国国内における文化的秩序の構築

加　藤　誠　章

## 序論—Introduction

標準語とは何か、と問われた際、果たしてどこまで正確な回答ができるであろうか。標準語を使う際には、私たちが作り出す膨大なヴァリエーションの中から適切な言葉を選び、正しい使い方をし、その言語を使う全ての人間が理解できる使い方をする。このような使い方が一般的な「標準語」であると認められているはずである。

「然るべき言葉」とは、どこから選べば良いのか、「正しい使い方」とそうでないものの違いは何か、どうすれば全ての人間が理解できるのか、これを考察することが「標準語」を考える鍵となるようである。本論ではまず、現代英語における言語標準化の過程を追い、なぜ標準語が必要とされたのか、標準語を整備することによってどのような効果や影響があるのかを考察する。標準語が存在するとすれば、それ以外の言語はどのようなものなのかも併せて考え、標準語と対峙した際に示す反応はいかなるものなのかも考察したい。

16世紀頃から、イギリスではナショナリズムという意識が高まるようになる。ここでいうナショナリズムとは、自国への誇り、独立性、オリジナリティ、自

己帰属意識といった、様々な面から「自国家」を第一に考えようとする動向である。この根本には、西洋文化の本流は、言語の面から言えばラテン語やギリシア語といった、イギリス人にとっての「外国語」にあったという伝統が根強く影響している。宗教や科学など、知識の上層を占めるとされた分野において、言語という媒体が自分たちのものではなかったということは、イギリス人にとってある種の「後れ」や「焦り」を感じさせたのだと思われる。

特に、1588年にスペインの無敵艦隊を武力によって撃ち破ったことは、エリザベス１世（Elizabeth Ⅰ）の治世の下、ヨーロッパにおける「大国」としての地位を徐々に高める恰好の契機となった。国際社会において、自らの手で秩序を築いていこうとするならば、国力を内側から増強することも必要になる。王を頂点とした政治の秩序を築き、貿易を中心にした経済の秩序を築き、同時に言語を中心にした文化の秩序も築かなければならないと考えられたのである。「大国」あるいは後に「帝国」として発展する要素の一つとして、言語の整備が必要であった。本論では特に、標準英語の発展に伴う、社会的・文化的作用に注目したい。

## 1　標準化以前の英語と標準化の始まり
## —Spelling and Literacy

古典ラテン語が学術・宗教における崇高な言語として確固たる地位を築いていた理由の一つに、規範文法が存在していたことが挙げられる。それらの言語を本論では「古典学術語」と呼ぶことにする。規範を参照することにより、言語の固定化がなされ、それに従った用法だけが「正しい」ものであるとされていた。このことから、指標の存在が言語の標準化には必要であるということができる。一方、英語はそのような文法がはっきりと成文化されていなかったため、指標が存在せず、様々な用法が混乱・混在していた。綴りをはじめ、語順なども同時代の言語において色々な形が使われていたようである。

英語における標準化の始まりとは、これらのばらつきを一つの形にまとめる意図がまずあったようである。しかしながら、標準化がどのように進んでいったのかを、１年単位で具体的に西暦の数字を示すことはできない。というのも、1476年のWilliam Caxtonによる印刷術のイギリスへの導入や、1755年のDr. Samuel Johnsonによる*A Dictionary of the English Language*の出版といった、標準化に影響を与えたであろう出来事の発生を具体的に挙げることは出来て

も、その影響がいつ、どのように現れたのか、具体的な年を指して根拠を示すのは難しいからである。標準化の影響とは、特に文語において、時代経過と同時に緩やかな変化としてみられるものだと思われる。

Rissanenによれば、まず、標準化が起こる言語の要素は文語であるとしている。

> The rise of standard language is closely connected with increasing literacy and the wide distribution of written texts representing various genres with various functions. (Rissanen : 117)

特に英語においては第一に、綴り字の統一が必要であった。現代英語において、一つの単語で綴り方が複数存在するものは少なく、例を挙げるとすればイギリス英語の*colour*とアメリカ英語の*color*等に違いが見られる。*Oxford Advanced Learner's Dictionary*を参照すると、見出し語として*colour*が挙げられ、続いて"American usage"として*color*がある。*OED*を参照すると、語源は古フランス語に由来し、古くは*colur, colure, coulur*も存在していたようである。

しかし、「標準化」の観点から見れば、イギリス英語の*colour*とアメリカ英語の*color*の違いは、綴りにばらつきがある時点で、完全には「標準化されていない」ということになる。つまり、「標準化」とは、「常に一つの形を理想としている」ことが特徴であるといえる。

とは言え、「イギリス英語」「アメリカ英語」という区別が存在する現在、それぞれの範疇内で見れば、*colour*と*color*は両英語それぞれで「標準語」として通用していることになる。私は、この例は「標準英語」の現状を見るには興味深い事例だと考えている。「一つの形を理想とする」と述べたが、その「理想」の在りかが、現在揺らいでいるのである。つまり、英語の権威を英語の母国であるイギリスに圧倒的に求めるのは、時代遅れとなりつつある。英語が帝国主義支配の道具として、イギリスの手中にあったうちは、英語の権威というものが英語の母国であるイギリスに集中していたのだが、現在英語が世界中に広まるにつれて、それぞれの地域でそれぞれの「英語」として機能し始めている。

話題が逸れたが、標準化以前、特に中英語から初期現代英語（12世紀～16世紀）にかけては、一つの単語に複数の綴り方があることで、言語を不安定にさ

せていた。ここでいう「不安定」とは、話者によって語の綴り字の認識にばらつきが見られ、結果として一つの語に複数の綴り字が存在する状態をいう。

And when his honor has thee redde...
(Edmund Spenser) (1579) [2]

Present mirth hath present laughter...
(William Shakespeare) (1601-02) [3]

上の二文において、一般動詞haveが、三人称単数現在形変化をするにあたりSpenserは*has*、Shakespeareは*hath*という形を用いている。ここで興味深いのは、20年ほど時代の古いSpenserが現在用いられている方の*has*を使用している点である。このことからも、当時は話者によって認識のばらつきがあったことは明らかである。

「一つの形にまとめることが理想である」という論は「どちらを選ぶべきか」「どちらが正しいか」という選択を生じさせる。この理想を達成した形が「標準語」であるということになる。つまり標準語とは「正しい形をしている」言語であるという考え方が導かれる。

標準化のプロセスとして、まず、文字という視覚的手段に依ることが効果的である。規範を示す手段として「固定された」綴り字は、言語を例証・提示し、参照させるのに最も良い方法である。

## 2　言語の淘汰と選択
## —Selection of a Specific Language

標準語を示すには、文語が効果的であることを確認した。次の段階として、どういった言語を文語と認め、標準語とするかという点に移る。逆に標準語とされなかった言語とはいかなるものであったかも同時に考察したい。

まず、標準語に対する認識として、特徴的なものを以下に挙げる。規範がないことへの危惧が色濃く表れている。

I cannot help think it a sort of disgrace to our nation, that hitherto

> we have had no such standard of our language…
> (Lord Chesterfield. *Miscellaneous* Works. 1777) (Crowly : 93)

Chesterfieldは、「言語」と「国家」を結び付けた上でこのような考え方を持っていたようである。国家の持つ言語、つまり国語として標準語が必要であるとの見解を示した。そこで、標準語としてどの語を採用していくか、これは単に「文語」つまり文章・文学作品の中からひたすら語を選んでいくのではなく、きちんとした「国語」としての要件を満たした語を選ぶ方針が取られた。その背景として以下のような考え方があった。

> [T]here is no doubt that the received literary English, such as I am using at the present time, is considered the English language pure and simple, and the other forms used in England are considered to be its dialects…
> (Alexander J. Ellis. *Transaction of the Philological Society*. 1882-4) (Crowly : 117)

ここでEllisが唱えているpure and simpleとされる言語が、「国語」として認められるべきものになる。それが「標準語」に属する語であり、逆に彼が方言であると示している言葉は「標準語」に属すものではないと読みとることができる。

そこで言語の多様性が問題になる。Ellisが示したdialectとは、果たしてどのようなものなのか、これが言語の多様性の結果として表面化する。

> [ I ]n a true and defensible sense, every individual speaks a language different from every other…
> (W. Dwight Whitney. *Max Müler and the Science of Language*. 1875) (Crowly : 96)

Whitneyの言によると、言語は一人一人によって違う。個々が違った言語を話している中からどれを選ぶべきかということは、標準語の選択過程でその選択理由をはっきりさせる必要性を生じさせたのだといえる。

しかし、ここで安易に「方言を排除して標準語を取り入れる」という結論を下すことはできない。言語の多様性という観点から見れば、「すべての言語は方言である」ということもできる。標準語が存在し、それ以外の言葉が方言であるというEllisのような考え方は、標準語が存在する以前には当てはまらないことになる。この論に立ち返ると、標準語も元は方言であり、ある理由で「選ばれた」方言が標準語となっていたのではないかと考えることができる。

13～14世紀の言語状況について、Skeatが中部方言に関連して以下のように述べている。

> Began in the thirteenth century to assume an important position, which in the fourteenth century became dominant and supreme, exalted as it was by Chaucer. Its use was really founded on practical convenience. It was intermediate between the other two [Northern and Southern], and could be more or less comprehended by the Northerner and the Southerner…
> (W. William Skeat. *The Science of Etymology.* 1912) (Crowly : 101)

Skeatによれば、当時の中部方言はその地理的条件と文学作品による影響から、北部・南部の人々も中部方言なら多かれ少なかれ理解できたものだったとしている。北部・中部・南部と３つに区分された地域方言話者が、好条件下にあった「中部方言」なら理解できたということは「一つの形を理想とする」標準語に必要な条件を満たしていると言える。標準語に選択され得る言語とは、多くの人間のコミュニケーションに役立たなければならないものなのである。示すべき規範として、より多くの人間が理解できるものでなければならない。

多くの人間のコミュニケーションに役立つ、という理由は、ロンドンという都市の存在も無視できない。Keeneによれば、産業が発達するに連れて、ロンドンへの人口集中が始まった。労働者人口の集中や商工業の集積地となっていた事実は、ロンドンに出入りする人々の中で共通の「ロンドン方言」が徐々に地位を上げていった。

> Yet London was also the English city where the greatest number of languages and language types, of both regional and overseas origin,

were spoken and intermingled. (Keene : 94)

多くの人々によって理解され得る媒体としての方言は、標準語となるための要件を備えていることになる。ロンドンに集まる人々は、Whitneyの論のようにそれぞれ個々に言語を持ちながら、コミュニケーション手段としてロンドン方言を理解し、使用していたのである。13〜14世紀には中部方言が優勢であったという事実によるSkeatの分析は、ロンドン方言にも当てはまる。

ここで注意したいのが、ロンドン方言が標準語とされていく過程で、口語から文語への推移がある、ということである。「方言」とはそもそもどういうものなのか、以下にSkeatによる言を例出する。

> [T] he old sense, in English, of the word dialect was simply a 'manner of speaking' or 'phraseology', in accordance with its derivation from the Greek dialects, a discourse or way of speaking...
> (W. William Skeat. *The Science of Etymology*. 1912) (Crowly : 98)

Skeatによるdialectの定義は、「話し方」のことである。つまり口語において使われる言語である。コミュニケーション手段として使われたということは、もともとはやはり口語であったといえるが、それがどのようにして記述されていったのか、それはロンドンという都市の中心的威信が言語に権威を持たせ、文語として認められていった背景がある。

> By the sixteenth century, this variety was well-established in the domain of literature.
> (Lieth : 41)

また、ロンドンは首都である。人間の集まりだけでなく、政治・経済などの中心的威信を持っていたということは、ロンドン方言が威信とされ規範とされて行くと同時に、国家と言語が結びつき、中央集権型の秩序形成が言語においても進むことを意味する。

多様の中から単一を選び、それを広めていくという過程は、単一として選ばれたもの以外は切り捨てていくこととなる。実際、ロンドンに集まった他地域出身の人々は、自らの内にあるいわゆる「お国言葉」をしまい込みながら、ロ

ンドン方言に慣れていったと考えられる。国語として標準語を規定するということは、同じ国家にある言語とは言え、標準語以外の言語は規範として認められない。ゆえに、標準語と方言をはっきりと区別するという姿勢が強くなる。

> The question is not whether a dialectic word belongs to the standard currency of the language, but whether on other grounds it deserves to be recorded...
> (Derwent Coleridge. 'Observations on the Plan of the Society's Proposed New English Dictionary.' *Transactions of Philological Society*. 1860-1) (Crowly : 104)

Coleridgeの意識の中では、標準語は方言ではないと明白に処理されている。標準とするべき言語ももとは方言であったことなど、忘却されてしまったかのようでもある。記録するべきものとしての標準語は、社会、ひいては国家全体に示すべき言語であるという認識が生まれたのは、標準に対する威信と規範が高まった結果であろう。

ここで一つ断りを入れなければならない。これまで、dialectについて私は単に「方言」と表現してきたが、それは「地域方言」を示してのことである。論を進める上で便宜上そう記してきたのだが、ここでdialectのもう一つの側面である「社会方言」と区別する必要が出てきたのである。地域的区切りとは別に、社会的区切りにおける差異を言語が持つようになり、どの地域の言葉であるかを問題にすると同時に、あるいはそれ以上に、どの社会階層で使われているかが問題となり始める。

地域の選択が終わっても、その地域内で全く単一の言語が使われているかと言えば、そうではない。文語となった地域方言でも、口語会話の中では文語のような整った形で発音されるわけではない。それは私たち自身の言語使用を確認すればわかる。人に話しかける際と文章を書く際で、全く同じ言葉を使うことはあり得ない。これは先述したWhitneyの論に当てはまる。その中で生まれた口語と文語の差異が、社会方言に繋がっていくことになる。

すなわち、政治・経済・学問・宗教など国家的秩序の拠り所であり、人々に指し示される「規範」となるべき分野に使われる社会方言が、標準語として選ばれることになる。地域方言としての要素だけでなく、実際に国家的秩序に関わる分野で使われる社会方言でもあること、この二つが標準語、ひいては国語

としての条件なのだと言える。

## 3　標準語彙、国民文学から文化的自立へ
## —An Identity and the National Language

では、規範となる語をどのように示したらよいのか。具体的手段として国語辞典の編纂があった。*The Oxford English Dictionary*（1888－1933）の編纂が始まるのである。Philological Societyによって実際に語を選び、記述していく作業が進むわけだが、これまでに確認した「標準語の要件」を満たす語を選ぶ基準として注目すべき点がいくつか挙げられる。

文語であることはもちろんだが、中でも「文学」に焦点が当てられたことは特筆に値する。使用例の例証として、語としての意味を単純に示し得るものが文学の中にあると考えられたのである。

> [E]very word in the literature of the language it professes to illustrate... (Crowly : 111)

> [A]dmit as authorities all English books... (Crowly : 111)

ここには一つの民族的アイデンティティの誇示意識があったのだと思われる。それまで学問において、本流とされていたのは古典学術語であり、英語を学問として認める、あるいは権威・規範として認めるということは軽視されてきたが、*OED*の編纂過程ではまさに自らの言語である「英語」を第一に考えようとする姿勢が決定的になったと考えられる。

語を選んでいく上で、民族的アイデンティティに立ち返るとすれば、当然ながら歴史を遡っていくことになる。ここで問題となるのは、英語というアイデンティティに属するのは、どの時代までなのかということである。イギリス国民の先祖は大陸から移住してきたゲルマン民族であるとされているが、イギリスにおいては人種的民族系譜と言語的民族系譜は必ずしも一致していない。ケルト人に始まり、彼らを駆逐していったアングロサクソン人、フランスからの征服者であるノルマン人など、島内には次々と様々な人種がやってきた。また、使われた言語もその影響を受けて変化してきた。イギリス人はこれらの民族が混ざり合った結果として構成されており、その歴史の中から、「*OED*編纂時点」

ひいては現代英語に規範として示し得るものを選ぶ必要があると考えられた。*OED*編纂における一つの結論が以下の如くである。

> The limits of quotation in point of the time are next to be fixed. We have decided to commence with the commencement of English, or, more strictly speaking, with that definite appearance of an English type of language, distinct from the preceding semi-Saxon, which took place around the end of HenryⅢ. (*Proposal For the Publicication of a New English Dictionary,* Appendix to the *Transactions of the Philological Society.* 1857) (Crowly : 113)

Philological Societyは、現代英語の根幹として認める語彙は1258年のヘンリ三世の時代からの英語に制限すると規定した。これは言語形態として、なるべく「現代」へと繋がるものを選ぼうとした姿勢の現れと捉えることができる。古典学術語が示唆する「古代」から、「現代」へ権威の中心を移すべく、Britainという地理的な区切りにこだわらず言語そのものの歴史を重視した結果である。

> [W]hat is commonly called Anglo-Saxon, is no more intelligible to an Englishman of the present day who has not made it a special study than is German or Dutch.
> (George L. Craik. *A Compendious History of English Literature and of the English Language from the Norman Conquest; with Numerous Specimens.* 2 vols. 1861) (Crowly : 115)

Craikの論によれば、古英語は現代人が理解するには特別な学習が必要で、ゆえに規範とする標準語に含むべきではない。もし古英語が権威として現代英語に必要であるとすれば、それは古典学術語に求心力を求めていた過去と同様の過ちを犯してしまう。ここでいう過ちとは、外国語である古典学術語に文化的中心性をおいた結果、自らの文化的規範が存在しないという事態である。

だが、古英語が学問の対象としての価値を持たないという意味ではないことに注意しなければならない。あくまでも標準英語を成す語彙を選ぶ上での論点である。古英語研究が民族の言語的アイデンティティを探る上で重要であることは言うまでもない。

この議論に関連してさらに述べると、文学に目が向けられる中で、やはり古典研究の必要性が叫ばれるようになった。現代英語の規範語彙を選定する意味である時点での時間的境界を引いたわけだが、民族のアイデンティティに注目すると現代に繋がるあらゆる文学を対象にした方が自分たちの存在を文化的・言語的に確立する上で意義がある。

> [B]y studying the literature of a language in order of time, or chronogically, beginning with the very oldest books, and coming down to the latest and newest. (Richard Morris. *English Grammar*. 1874) (Crowly : 121)

母国語による文学を研究することは、単に文学を構成する言語を考証するだけでなく、文学そのものを評論することにより、包括的な文化の研究にもなる。語から文学へ、文学から文化へ焦点を移していくことがイギリス国民としてのアイデンティティ確立に役立つと考えられたのである。

ここで私が「国民」という表現をした意図は、イギリスという国家を構成するあらゆる人々が持つべきものであるという背景が存在すると考えているからである。ここでいうそれは、個人のアイデンティティではなく「イギリス国民としての」アイデンティティであると言わなければならない。文化の確立は国家秩序の形成にも繋がるという論の土台には、全体の統一意識を持たせるために共通の所属意識が必要だという考えが存在する。

> Classical studies may make a man intellectual, but the study of native literature has a moral effect as well. (The Early English Text Society. "The 7th Report". 1871) (Crowly : 123)

このThe Early English Text Societyは、Skeatが設立した古英語・古典文学研究のための組織で、それらの機会を広める意図があった。当時のイギリスでは古典文献は入手が難しかったが、なるべく多くの人々が古典テクストを手に取れるようにする目的があった。国民が古典テクストに触れることで、道徳面でも「イギリス人」として文化を起点とした洗練さを得られるとしたのである。

## 4　非標準語に対する姿勢
## —Dialects separated from the Standard

2章で述べたような考え方に基づいて標準語が選ばれていく中で、非標準語は、同じ「方言」と呼べるものであるとは言え、区別される運命となる。標準語が権威・規範として崇拝されるようになる中で逆に蔑視の対象となっていったものも中には存在する。なぜ非標準語の地位が低く見なされるようになったのか、これは中央の権力が強くなっていった結果だと私は考えている。中央集権的秩序が存在しない社会では、個々の言語は絶対的なものとして存在する、すなわち各々が使用する言語の他には相対的に比較対照されるものがないのではないか。これはいささか極論的だが、権威の出現と共に権威に属さないものが退けられていったのは確かなようだ。

> Kentish shared features with dialects to the west...and these features were sufficiently from the dominant East Midland forms to be easily exploited as a marker of comedy, boorishness, or rusticity. (Lieth : 42)

ここで挙げられているのはケント方言である。16世紀には、“dominant”から区別された同方言は、区別から差別への道を歩むことを余儀なくされたようである。人として知的で洗練された印象を与えたいという願望は多くの人間が持つところであろう。この差別意識はそのような願望、つまりできるだけ権力・威信を持った中央へと属したいという帰属意識がもたらしたものではないだろうか。また、教育の場で標準語が教えられていったことも、そのような意識を促進していたのではないかと思われる。

> ‘Standard English’ is a subject taught in schools: and ‘acceptance’ is backed up with the teachers’ rod. (Lieth : 44)

しかし、19世紀の*OED*編纂過程の中で、そのような方言に新たな価値が見出されることになる。2章で確認したように「正統な」標準語を選んでいく過程でそれに属さない方言が抽出されていったわけだが、方言に対する認識が「退けるべきもの」から「区別し、記録するべきもの」へと変わっていったことは

大変興味深い。

1873年に、SkeatがThe English Dialect Society（以下EDS）を設立する。その意図を要約すると以下の通りである。

1. 地域方言研究に関心を持つ者に、その研究機会を与える。
2. 地域方言研究の成果を集積し、地域方言の記録を編む。
3. 稀少、あるいは量的充足を満たしていない有用な語彙集を再版する。
4. 個々の地域に固有な地域方言に限定した語彙を集め、出版する。
5. 地域方言研究に関心を持つ者に、物質的情報源の参照を提供する。

(T*he English Dialect Society*. "33vols" 1873-95) (Crowly : 105) [3]

このような考え方をもとに、*OED*に収録する語彙とは対極にあるものが*English Dialect Dictionary*（1898－1905）に収録されることになった。

> [T]he [last] chance of saving the fast-fading relics of those forms of archaic English which have lingered on in country places...
> (Aldis Wright. *Notes and Queries*. 1870) (Crowly : 106)

16世紀には「嘲笑の対象であり、非知識人の証」であるとされていた地域方言が、知識人のための研究材料へと地位を向上した。この背景には、地域方言を標準語と区別する一方で、「国語」を考察するとそこには国家内のあらゆる言語が内包されるという意識が確立したものだと受け取れる。ここから導き出される私の考えは、「『国語』は必ずしも標準語だけを指してはいない」ということである。国家と言語の、史的あるいは地理的に正統な系譜を辿った上で「国語」を考える際には、「全ての国民が理解できる共通の言語」であることと、「国家内におけるあらゆる言語」でもあるという二面性に留意する必要がある。国家内で地域的差異があり、「あらゆる言語」を包括してしまうと「全ての国民が理解する」ことは難しいように思え、矛盾しているとも受け取れる。しかしながら、原点に立ち返って考えれば至極当然のことであるとも言える。単純に「英語」について考えた際に、標準英語だけが英語であるはずはなく、方言であってももちろん「英語」なのである。この二面性を明白にするのが「『国

語』教育」の意味で使われる場合と「母『国語』」ひいては「母語」の場合で使われる場合の意味の差異である。捕捉するとすれば、「母国語」と「母語」は言語の多様性を視野に入れた場合の区別である。前者には「国家」という概念が大前提として存在するが、「母語」はその概念を越えた、あるいは国家の概念を分け入って個人のレヴェルまで多様性を深めた際の認識である。すなわち、標準語が前者を生み出す以前に、実は標準語は後者から生み出されたのである。

中央への帰属願望が地域方言の差別意識を生んだ一方、のちに標準語による学術的規範を得ようとする中で地域方言の価値が見直されたことは、*OED*の編纂を通して、「国語」の二面性に気付き始めたことが影響したのだと思われる。[4]

## 5　模倣から生まれた自立
## —Cultural Independence

アイデンティティを自らの文化の中に見出すことは、それまでの模倣としての文化的規範から自立した文化的威信を得るという脱皮を図ることになる。文化的自立意識は、既に16世紀には起こり始めていた。

> '[M]ightily enriched, and gorgeously invested in rare ornaments and resplendent abiliments' as Francis Meres wrote in 1598. (Palmer : 1)

この表現は、自国語としての英語に対する誇りの現れである。このような賛辞を自国語に与えるに到った背景には、英語に対する相対的な劣等感があったのだと考えられる。何に対してそのような感情を抱いていたのかと言えば、ラテン語・ギリシア語等の古典学術語に他ならない。

> English was the language of common usage, and that to advance its 'puritie and elegance' was further to imitate the Greeks and Romans ... (Palmer : 5) [5]

日常的な使用言語であるという意識は、vernacular（土着語）としての英語の立場を低く認識する原因にもなった。日常語は英語、学術語は古典語という二層構造は、思考と母語が乖離してしまったと言っても過言ではないだろう。

また、このような状況がprestige（威信）としての古典学術語にある種の信仰をもたらしたのだと言える。知識人となるために、自ら進んで学ばなければ手段としての言語すら身に付かないという事実は古典学術語が崇拝されるに十分すぎる要素であった。

その中で、vernacularも学術的手段として採用する動向が現れる。ここで挙げたいのは、Sir Thomas Elyotらによる一連のルネサンスの「模倣」である。*The Dictionary*（1538）という羅英辞典を作ることによって、ラテン語の語彙を英語に取り入れ、それまで英語に存在しなかった語彙を増やそうと試みた。この結果、語彙を増やすことはできたが、それは古典学術語を学ぶための語彙という一分野における橋渡しに過ぎなかった。しかしながら、vernacularをprestigeに触れさせたという意義は大きいように思われる。自分たちの文化を少しでも規範に近づけたいという願望の現れである。

> [T]he vernacular, and a desire to adapt it as a vehicle fit for the learning.... (Palmer : 2)

vernacularによってprestigeにどうアプローチしていくか、この挑戦が模倣の動機であった。まず、規範が存在しなかった時代の言語状況を考えると、文法的規範がなかったということは、「正しい」言語の判断が難しかったことが想像できる。2章で考察したように、「一つの形を理想とする」ならば、どのような形が理想なのかを示す必要がある。そこで必要性が高まるのが文法書である。ラテン語やギリシア語には成文法を示した文法書が存在し、それに倣って語法を身に付け、結果として一つの形の「標準語」が存在した。それまでラテン語・ギリシア語が「学問における正当な言語」として認められ、学ばれてきた根強い歴史が根底にあったことが、vernacularのための「文法書」にも威信を持たせようとする原動力になったようである。

ここで挙げるのはまず、Bishop Lowthの*A Short Introduction to English Grammar*（1762）である。ラテン文法の法則、特に品詞分類を英語に当てはめる点は模倣の域を出ていないが、英語の特徴である統語に重きを置いた点は、次第に規範を取り込んで自らのものとする傾向を表している。加えて、Lindley Murrayの*An English Grammar*（1795）は、高尚な学術としての文法と言うより、一般に正しい言語の使い方を指し示すためのものとして広く使用された。

この事実は、古典学術語という彼方にあった威信をvernacularによって近づけたと言っていいだろう。

この規範文法の成立は、のちも強い影響を与えることになる。ここで現代英語にも強い影響を与えている規範文法について少し考察してみたいと思う。成立によるメリットとしては、vernacularであった英語にも威信を持たせ、「一つの形を理想とする」標準語の要素を持たせ、言語の変化を規制することによってその存在を強化する点が挙げられる。これらのメリットは威信を求めた18世紀には大変都合の良いものであったが、4章で考察したように言語の多様性が認められる現在、ときとしてメリットばかりではない。

Liethはこのデメリットを「文法に関する誤解」として5つに分けて示しているが、中から3つを挙げてみたい。[6]

1. 「文法を知っている」人と「知らない」人がいる。
2. 文法は文語だけに存在する。
3. 文法とは、善し悪しのあるものである。

この3つに共通している「誤解」の原因は、「規範があって初めて文法が存在する」という認識である。成文化された規範がない状態から法則性を見出し、Lowth, Murrayともに文法書を編んだわけだが、この二人が見た法則性以外は文法ではないという誤解をもたらしているのである。

> What we need to do is redefine the notion of grammatical rules, to cover the patterns that in a variety of contexts we actually produce. (Lieth : 88)

このように、Liethは文法を「再定義する必要がある」と述べている。この論の根本にあるのは、文法とはコミュニケーションをするための言語使用の法則であり、その法則によるコミュニケーションが成立した時点で、その言語使用法則は「文法的である」と言うことができる。つまり言語を使用できる人間ならば1のような事実はない。また、2の原因として、規範文法が文語から、文語のために編まれたものである点が挙げられる。この誤解は、規範文法の圧倒的な力により、文法の原点は文語であるという点で認識が停止してしまったこ

とによる。もともと文語は口語から発生したものなので、口語には文法がないということは有り得ない。3の原因は、威信の付いた規範が示された結果、規範以外の文法は善悪で判断され、貶められてしまう点にある。そのような文法は“vulgar”（俗語）というレッテルを貼られてしまう。

規範文法により、文法的規範は威信を伴うことになったが、これがもたらすデメリットは標準語が非標準語にもたらすデメリットにも共通する点がある。威信を全て正統とみなし、それ以外を貶めるという効果は、言語の多様性を論じる際にはそれを否定する要素となってしまう。

また規範文法が模倣したラテン語も、相対的に英語を“vulgar”と位置づけていたのは事実である。威信の模倣は皮肉なことに、デメリットも模倣してしまったのである。

再びvernacularのprestigeへのアプローチ過程へと話題を戻すことにする。古典学術語を学び続けることが、果たして有益なのかという疑問もあったと考えられる。ラテン語などの文法を習得して、logic, rhetoricといった研究方法を身に付けることが威信とされる学問の基礎であったが、そのような方法が次第に意味を失っていったことも事実であろう。

> [W]ith the final decline of Latin as a living language, this classical education lost whatever utilitarian purpose it once had… (Palmer : 3)

それまで学ばれ続けていた古典語が意味を失っていった原因は何か。それはvernacularとprestigeの乖離があまりにも進んでしまったためであろう。vulgarとされた日常語である英語は学術語として認められない一方で、日常ではその英語を使っているということは、単に学問の価値の失墜のみならず本当に役に立つものではなくなってきたと言えるのではないだろうか。

文法書は初歩的な教育の場で使われることが多かったが、さらに高度な文化的威信を目指すには大学における学術研究の充実を目指す必要がある。古典学術の束縛を最初に振り払ったのが、反国教会者によって設立されたアカデミーである。このアカデミーは様々な文化的背景を持つ学生を対象に総合教育を行ったため、古典学問から近代言語などへ学術対象を移していった。これは古典学術語習得に主眼がおかれたそれまでの教育による手段と対象の乖離を引き戻

す働きがあったと考えられる。単に引き戻すだけでなく、それまで二層構造をしていた日常語と学術語を融合させる効果もあった。

> Those colleges flourished up and down the country, giving a general education... (Palmer : 7)

このような私塾であるNorthampton Academyを設立したPhilip Doddridgeは、それまでラテン語で行われていた高等教育を英語で行った。また、その弟子であるAndrew KippisとJohn Aikinは英文学、それも"Belles Lettres"(純文学)の教授を始める。古典からvernacularへと視野そのものを移すこと、これが威信を自らの手から作り上げていく恰好の契機となった。vernacularを手段としても、主眼が古典学術語にあったままではvernacularを学術対象とすることは有り得ない。模倣から自立への突破口を切り開いたという点でこれらの事実は重要である。Priestleyは実学的学問の必要性を説く中でこう述べている。

> [T]he studies of youth should tend to fit us for business of manhood ...
> (Joseph Priestley. *An Essay on a Course of Liberal Education for Civil and Active Life.* 1765) (Palmer : 9)

学問は古典語、日常語は英語という二層構造が解消することによって思考と言語が一致することは、そのままアイデンティティの一致にも繋がると言える。vernacularとされる言語とともに抱えていた自らのアイデンティティが学術にも植え付けられることになるのである。ここではじめて、vernacularで学問をすることの意義が達成されたと言っていいだろう。英語英文学研究の始まりは、学問対象そのものが自らのアイデンティティに属するものであることが功を奏して急激に発達したと言える。

vernacularを介したvernacularの研究がどう役に立つのか、さらなる答えとして、イギリスの国家的発展と同時に地位を上げてきた中流階級が威信とされる学問を身に付ける必要があったことが挙げられる。かつての上流階級がそうしていたように、文化的秩序を持った国家を形成する国民からは、知識を蓄える営みを欲されていた。

> [A]n understanding of polite literature and of composition is a preparation for the attainments of the scholar and the tastes of a gentleman...
> (Palmer : 11)

文学を通した自らの文化の確認とそれに威信を認めることは、イギリスという国家に威信と共に自信を与えることになるとも考えられた。標準語である母国語で教育を施され、英語英文学に規範と威信を認めると言うことは、文化的側面から道徳を向上させる働きがある。他の何にも属さない、唯一のアイデンティティは中央への帰属意識の中心点を古典学術から母語研究へと導いた。外部の規範から威信を見出すのではなく、自らのアイデンティティの中に見出すことが、イギリス国民・イギリス文化への誇りを持たせる原動力となり、文化的秩序をもって自立していくことになるのである。

## 結論—Conclusion

以上の考察の通り、標準英語の成立過程は同時に、イギリスにおけるアイデンティティの所在の模索という社会的・文化的秩序の一つの系譜を成している。標準語を生み出すための方法命題として「単一の形に収束させる」ことが強調されてきたが、その際には標準化イデオロギーとでもいうべき様々な力が言語にかけられ、選ばれていったことがわかる。文語と口語、中央集権秩序による地域方言・社会方言の選択などが進むにつれて、多様から単一への道を歩み、標準化イデオロギーは標準と非標準という二項対立を確立し、prestigeとstigma(汚点)に分化するかに見えた。しかし、民族的アイデンティティの誇示という新たな概念が見出された途端、stigmaも包括して「国語」として発展し、結果として国語の二面性が見られるようになった。これは、標準化イデオロギーとはまた別の、“Englishness”と呼ぶべきideologyが英語を制覇したからであると考えられる。

また、ラテン語・ギリシア語という英語にとっての外国語が文化的威信を持っていた事実により、古典学術語イデオロギーが英語を圧倒していたという状況は、英語標準化の過程で英語内部においてprestigeとstigmaが発生した事態と同じように、文化的価値に基づいて英語がstigmatizeされた。この場合の二項対立は、民族的アイデンティティの誇示によって、模倣から自立に達するま

での力を付け、prestigeとされたものが退けられた結果になった。つまり“ideology of Englishness”は「イギリス」という国家概念に強く裏付けされていると言えるのである。

本論では、標準英語の成立による影響をイギリス国内における事例を挙げながら論じてきたが、標準英語のもう一つの側面として外部との接触もある。つまり国力を付けたイギリスが“ideology of Englishness”を備えた英語を携えて帝国へと発展していくのである。国内の文化的秩序の形成までに到る段階が、大きな区切りになると判断したため、本論は国内での標準英語の考察に終始した。

外部の多様性と接触した際の英語がどのような反応を示し影響を与えたかを調査し明らかにすると共に、同じく帝国としての発展を意図した日本と日本語についても同時に考察していくことにより、言語と帝国主義の関係についての研究を進めていくことを今後の課題としたい。

## 註

1 *The Shepheardes Calendar.* "To His Book" 本文中の引用はAbramns（262）による。
2 *Twelfth Night.* Act 2, Scene 3. "Oh Mistress Mine". 本文中の引用はAbramns (488) による。
3 Crowly（105）における引用を元に、筆者が試訳・要約した。
4 2章に例出したEllisの言葉（Crowley 117）を再考すると、国語の二面性に彼が気付いていたかどうかは疑問が残る。しかしながら標準語を指す意味での「国語」として "the English language pure and simple"と表現したとすれば一応の納得はできる。
5 Palmer（9）におけるJohn Brinsley. *Ludus Literarius on the Grammar Schoole.* (1627) に基づいての記述。
6 Lieth（87）の記述を筆者が試訳・要約した。

## 参考文献目録


Abramns, M. H. et al. eds. *The Norton Anthology of English Literature.* 5th edition. New York and London, W.W. Norton & Company : 1987.

Crowley, Tony. *Standard English and the Politics of Language.* Chicago, University of Illinois Press : 1989.

Crowther, Jonathan, ed. *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English.* 5th edition. Oxford, Oxford University Press : 1995.

石橋幸太郎他編『現代英語学辞典』(東京：成美堂、1973)。

Keene, Derek. "Metropolitan Values : Migration, Mobility and Cultural Norms, London 1100-1700" (Wright : 93-114)

Lieth, Dick. *A Social History of English.* 2nd edition. London and New York, Routeledge: 1997.

松波有他編『大修館英語学事典』(東京：大修館書店、1983)。

三浦信孝、糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』(東京：藤原書店、2000)。

Palmer, D.J. *The Rise of English Studies.* Oxford, Oxford University Press : 1965.

Rissanen, Matti. "Standardisation and the Language of Early Studies". (Wright : 117-130)

佐々木達他編『英語学人名辞典』(東京：研究社、1995)。

Simpson, J.A. and E.S., eds. *The Oxford English Dictionary.* 2nd edition. Vol.Ⅲ. Oxford, Clarendon Press : 1989.

高本捨三郎編『英語学英語教育研究事典』(東京：南雲堂、1980)。

渡部昇一『〈スタンダード英語講座第3巻〉英語の歴史』(東京：大修館書店、1983)。

Wright, Laura, ed. *The Development of Standard English 1300-1800 : Theories, Descriptions, Conflicts.* Cambridge, Cambridge University Press : 2000.

# The Development of Standard English and the Establishment of the National Cultural Order in the UK

Masaaki Kato

How exactly can we answer if we are asked what is the standard language ? When we have to use it, we may select the adequate words from enormous amount and use in the correct way so that everyone can understand it. Then, from where can we find the "adequate words" ? What is the difference between the correct way and the incorrect one ? How can everyone understand it ? These questions are to be discussed in order to examine the standard language. In this thesis, I will trace the process of the standardization of the English language and explore the reason why the standard language was necessary for the national language and also examine how it affected the nation. If there is a standard language, what is a nonstandard language ? At the same time, I would like to research how the nonstandard language reacted when it encountered the standard one.

From the 16th century, the consciousness of nationalism gradually arose in England. This was a tendency to regard the nation as very important. It stemmed from pride, independent spirit, originality, and sense of belonging. English people might feel a cultural lag or impatience because Latin and Greek occupied the fundamental current of culture in such categories as religion and science which filled the upper position of studies.

In 1588, England beat the Invincible Armada of Spain. Under the reign of Elizabeth I , they found the great opportunity to go up to the position of a "great nation". In international society, it was necessary for them to maintain the power of the nation from inside to construct the order. Furthermore in order to strengthen the power of the nation, they thought that they had to establish the order of government by king, economy by trade and culture by language. Maintenance of language was supposed to be an element of development as a "great nation" or an "empire". Especially in this thesis, I would like to focus on social and cultural effects with steps of standardization.